芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No.23 49. 6

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　芸術文化振興会議事務局
発行人・米田貞一　　編集人・矢野朔雄

夢のようなあの頃

昭和21年・第1回県美展

宮崎　豊
県芸振会議副会長・県美協会長・洋画

終戦後の昭和21年といえば、日本国内は思想的に何のまとまりもなく全くすさんだ状態であった。それに加えて物質の欠乏はひどくわずかな配給でやっと生きて行くだけの悲惨さであった。戦争中全然あと絶えていた美術協会はこんな時にこそ立ち上がって芸術の美の心で少しでも世の中の気持ちをやわらげることが出来ればと、有志・権藤種男、武藤完一、牧皎堂、生野祥雲斎それに新聞社の渡辺秀郎などが発起で、とにかく県下の美術作家に〝召集案内を出せ！〟と私に命令が下った。

日本画、洋画、彫刻、工芸の四部で、発送した案内状は誠におかしなもので用紙一枚無い時なので仕方なく私は学校の答案用紙の名前を切り落としたものの裏に謄写して出したものだ。だから40点とか70点とか点数がついていたことになる。

総会が開かれたこの年の11月には第1回展を開催した。総指揮に当たられた権藤会長は入れ歯をガツガツと音をさせながら「そうなんだよ」「そうなんだよ」とあちらこちらと立ち回られ、みごとに第1回展をやってのけられたのだ。その時の審査員は日本画に福田平八郎、金島桂華、洋画・江藤純平、権藤種男、工芸は生野祥雲斎。これをみてもいかに豪華な顔ぶれだったかがわかる。江藤純平さんは臼杵に疎開していたからいいようなものの、福田、金島両氏は別府の「おたふく」に宿泊。そんな費用はどうされたか事務局はいっこうに知らない。会費も取らず、県の補助金一つない時、会計はどうしたか不思議でならない。ただ会長権藤さん一人の力量で「そうなんだよ」「そうなんだよ」でけりはついたものだ。これでだんだんと会の組織もはっきりとなって行き、遂に現在のような立派な会となったのだが、思えば全てが夢のように思われてならない。

その時の美術協会展（昭和21年11月7日～13日）の状況を大分合同新聞記事のぬき書きで見ると次のようだ。

「═美術の秋を迎えて華々しく開く県美協展═秋を飾る美術の饗宴、芸術の匂い豊か═搬入総数 234点、入選71点研を競う秀作ぞろい。招待者、観覧者の入場新記録、日本画審査員、福田、金島両氏は次のように語る。焼け跡の会場で審査したことは感慨深い。資材の不足でさぞ作家は苦労したことだろう。作品のレベルは非常に高く、中央展の延長のようだ。新しい感覚の作品も多く今後が期待された。日本画部の受賞者、正井和行、大島桃山、宮崎衡、阿南東林。洋画部の審査員江藤純平、権藤種男両氏は語る。みんな大いにがんばっていて、レベルが非常に高いものがあった。力作が多く審査に骨が折れた。場当りな作品がなく堅実な作品が多かった。厳選で惜しい作品も相当数落ちた。今後ますます精進してほしい。洋画部の受賞者、岡義忠、伊東正明、辛島一誓、仲町謙吉、早川正。工芸部佐藤光甫、千綿勝。

また一般はこう批評している。今度生まれて第一回展を開いた美術協会展はいろいろな意味でこれまでになく盛観である。私たちの内心に蔵する敗戦後のわびしい気持ちに訴えることからいえばこの充実した明るさ、美しさは何物にもかえがたい喜びである。」

ほとんどの文化活動が何の音もない時、華々しくも大きく一歩を踏み出したものだと、けなげにも思われてならない。心から祝福したい夢のような思い出である。

[redacted]

〈昭和20年・30年代の大分県美術〉

第1回県美展受賞

「雨後朝霧」のこと

阿南東林

県美協名誉会員・日本画

21年、戦後はじめて大分県美術協会の総会があり、故権藤種男会長ほか各部長が選定された。

そこで第1回展の出品制作を考えてみた。しばらく不在で別府の地理すら忘れていたが、幸い浜脇の知人の紹介で旧家の離れを借りることになった。ある日浜脇界わいを歩き赤野峠に来た瞬間、高崎山の朝霧に驚喜、視界はことごとく湿度に模糊として目をさえぎり、雑念をはさまず、数本の杉木立ちの前に黄色の竹林丘、霧中に高く突立つ喬木、農工夫の鍬どり姿も風情があり、又麓へと斜に村落の流れるがごとく淡黒の雑木林、昔々肝腎の高崎山を見て、この様を、横広く大額面の全態淡黒で配して締めくくりをつけ作品にした。

私は引揚者で材料の紙もなく某表具師の厚意により壁紙を入手したので、不安を伴いながらも一気に二日間を要して仕上げた。審査員として来県されたのは福田平八郎、金島桂華両先生でとてもと思っていたが、末席ながらも特選を得て感激、賞金壱百円也を頂戴した。この金は後日有効に使うべく玖珠郡三俣山に写生に行き、二泊滞在して収穫を得たが、なお嚢中には金が余っていた。もって現在人には夢としか思われぬ古い時代の話。

[redacted]

13 水汲み　岡義忠
14 刈入れ後の風景　菅秋朗
15 緑衣婦人像　伊東正明
16 山村初冬　三浦直政
17 層崖　伊藤健之典
18 秋の久住山　白壁康
19 大威徳明王像　江口淳士
20 間門の富士　伊藤武夫
21 静物　後藤時枝
22 森の中　野上順平
23 収穫　辛島一平
24 向日葵　江藤哲
25 うすれび　佐藤健彦
26 風景　三輪省三
27 雉　後藤真吉
28 清姿　權藤種男
29 山櫻　吉松真司
30 古羅漢　武藤完一
31 新生　早川正
32 真木大堂不動明王宮崎豊
33 秋果　廣瀬宏文
34 厨房静物　片山一
35 菊　保田善作
36 顔　薬師寺濱子
37 川畔秋色　菅秋朗
38 柘榴　吉垣正男
39 みのり　河野通秀
40 赤いサラファン　森川豊三

41 苔　仲町謙吉
42 稔　濱田九一郎
43 馬　脇谷護
44 満洲農夫　古長敏明
45 廃屋のある風景　合澤三郎
46 九重山　兒玉亮
47 おはなし　中山和美
48 石佛　廣瀬○峙
49 舞子　川原隆夫
50 南瓜　東林
51 別府公園　矢野平次郎
52 自畫像　多郷直常

第四部（工芸）

1 齒朶之圖豊盆　檜原長甫
2 夕顔飾筥　佐藤光甫
3 黒猫飾筥　佐藤光甫
4 蛇紋飾盆　岩尾秀樹
5 鐵花器　那賀清彦
6 鑄銅獅子豊壺　千綿勝
7 鑄銅鶴首花瓶　千綿勝
8 漆冬ざれ手箱　森夜潮
9 漆からたち九盆　森夜潮
10 輪花永芳盛籃　生野祥雲斎

特別出品

上田カネ子刀自壽像　朝倉文夫

主催　大分縣美術協會　大分合同新聞社

昔の美協事務局

権藤会長と金（カネ）の工面

中　山　和　美
元県美協参与・洋画

戦後画材料のわずかな配給がはじまり、芸術家はようやく自分をとりもどしはじめた。

昭和21年になると東京から13年に疎開されていた権藤種男先生を中心に美術家たちが団結してここに大分県美術協会を結成することになった。

この大分県美術協会は昭和21年６月２日、大分市荷揚町小学校に日本画、洋画の当時絵をかいていた人々が集まって、総会も兼ねて結成されたが集まった人数は約60人であった。

この総会では会長に満場一致で権藤種男先生がきまり、日本画部長・牧皎堂、洋画部長・武藤完一、彫刻工芸部長・生野祥雲斎、事務局長に宮崎豊、事務局員は浜田九一郎、仲町謙吉、早川正、中山和美の４名がなった。そして早川、中山の両名が会計係を受けもったが、当時は協会に金（カネ）が無かったため、展覧会を開催するには会長に金（カネ）の工面をしてもらい、あとは入場料でまかなったものである。しかも展覧会開催に当っては、展覧会の受け付けから飾りつけ、あとかたづけまで全部事務局員でやってのけた。

当時は配給制で酒がなかったので会員の会合する時には事務局員が会長の紹介で庄内や向の原などの酒造元まで酒をもらいに行ったものである。

教育会館で展覧会を開催した時には会場の設備や会場費等がたりないために首藤雨郊先生にお願いして京都におられた故福田平八郎先生に色紙を二枚無料で戴き、それを当時８万円で売って協会の運営にあてたものであった。

第一回　大分縣美術協會展出品目録

【會期】昭和二十一年十一月七日―十三日
【會場】大分市　トキハ百貨店　五階

第一部（日本画）

1 椿　中島春畝
2 初夏　千原玲子
3 野情小春　佐々木静観
4 構内風景　河村玲子
5 小太郎落　松野青圃
6 寝顔　川田汎洋
7 葱　白石勝敏
8 秋江清遠圖　杉田春泉
9 汽車をまつ　西邑ゆり子
10 風景　小野孝
11 むかし　佐藤和子
12 いこひ　中島民枝
13 夏の鶴見　渡邊惣一郎
14 渓山清韻　河村李軒
15 婦人像　大島桃山
16 ダリヤ　古荘九汀
17 秋果　金島桂華
18 梅　福田平八郎
19 宵月　衛藤晴村
20 理髪室　宮崎衡
21 ドクトル　久間光一
22 柿　高山辰雄
23 如意輪観音　萱島青潮
24 秋山晩晴　草刈樵谷
25 兎　池田榮廣
26 寶池（故）牧阿彌三
27 冬日　宮瀬泉城
28 龜　細川幻華洞
29 母子　岩澤重夫
30 雨後朝霧　阿南東林
31 松　正井和行
32 菊　河野晶山
33 婦人像　松本真砂雄
34 配給日　牧皎堂

第二部（洋画）

1 人々　油野誠一
2 野菜畑　生野久夫
3 婦人像　熊井惇
4 窓邊　徳田宗忠
5 野菊　衛藤安子
6 月　鹿児島光彦
7 秋の高崎山　橋本富夫
8 流球古典調　名渡山愛順
9 小川先生の像　宮川泰孝
10 ポートレート　田中昇
11 鮒　田川豊
12 柿　江藤純平

又事務局は何とか展覧会を盛大にするために、二科展にならって展覧会の前日に前夜祭を行ない（28年春季展）事務局員を中心に会員の有志をまじえ十数人でキムラヤに集まり、そこで全員裸になってキムラヤからトキハまで踊りながらデモをし、トキハの２階のベランダで裸踊りをした。トキハの前は見物人で道路をふさぎ、遂に電車を止めたという前代未聞の光景もあった。

会長の権藤先生はいたって淡白で美協のことは一切干渉せず、事務局にまかせきりであったので事務局としては非常に仕事がやりよく、あの条件の悪い時代に美協が今日まで続いたのは一重に権藤会長の徳のいたすところと今さら思い出し、今後大分県美術協会がますます発展することを祈ってやみません。

スバル時代

論議に花が咲く

広　瀬　通　秀
県立芸短大教授・洋画

当時スバルは、お互いに制作上の意見を交換し合い向上を図ろうというところから、月に一回の例会を開く慣わしになっていた。

あれは、確か正月三が日過ぎの頃であった。別府の松岡さんのアトリエに集まったのは、岩尾(秀)、江藤、松岡、市原、菅（久）、薬師寺、幸、といった人々であったと思う。いつもなら「絵画はどうあるべきか」と言うようなところに焦点が合わされて、意見が絡みながら進行するのであるが、この日は幸さんが同席でもあり「絵」と「写真」の関係を深く掘り下げてみようや、と言うことになり、両方の立場からその特性の比較、分析に始まりその共通点、相違点などとだんだんいた。首藤会長が「芸術は経済の上に咲く花」と言われたのが印象的であった。又首藤会長は「字や絵に親む者に悪者はない。人を採用するに大いに参考になる」と言われた言葉もわが意を得たりとひそかに喜んだものである。今となっては一つの思い出となっている。

36年になって三宮君が病死、会にとっては大打撃であった。後任の山口九碩君がよく三宮君の遺志をつぎ、会員の収攬（らん）、貧乏世帯の救急等につとめてくれ、書協を今日の隆昌に盛り上げ、県美術協会合併に参画して今日に及んでいる。

戦後の特徴の一つに創作の気運高潮がある。これは一大革新であったと思っているが、しかしながら前衛、調和体（近代詩文を素材とする）少字数等はわがもの顔に台頭し大流行した。これら専門家の作品は良とし

書道隆昌のうら

収攬（らん）と救急

平　田　暘　邨
県芸振会議会員・県美協名誉会員・書道

昭和26年大分県書道協会創立当時、会員も不定、会費納入も不完全のまま世話人が気をあせるのみで２年間開店休業。何分敗戦後間もない混乱の中で物資は欠乏し、書道資材も入手困難となり、書道衰退も止むなくなった。

昭和30年大連（商工会議所会頭）より引き揚げた首藤定氏を会長に懇請し、県書協の基礎が確定した。当時は会員も不定、従って会費納入も不完全で、会は貧乏を極め、展覧会等の行事遂行に際しては当時の事務局長三宮霊山君がポケットマネーを出してまかなって

微妙なところに話が食い込んできて、気がつくと午前一時、二時となってしまった。遠方の人はもう帰れないし、こうなったら徹夜で語り明かそうと言うことになり、お互いにがんばりっこのかたちで窓の外が白み始めてきた頃は、誰が何をしゃべったのか覚えてない始末となった。もちろんアルコールのお世話になったのであるが、朝方奥さんの心尽しで戴いた雑煮の味が締めくくりとなったのである。絵と写真の立場の違いを論議しながら、結局はお互いの個性に還元されてきて収穫のあったひと時であった。

又、初夏の陽ざしの強い頃であったが、佐伯の神田、古川両氏の肝いりで南郡の大島へ大挙して出かけたことがある。

ポンポン蒸気の連絡船に揺られながら、南の暖かい透明な酸素を一ぱい吸って島に到着。小学校長の工藤先生のお宅に泊めていただいたが、その夜は思いもかけず新鮮な「海の幸」一ぱいのご馳走にあずかった。

いつもなら、けんけんがくがく論議に花を咲かせるところだが、今回はもっぱら磯の香りを満喫し、浸ることに終始し、それでもスケッチは欠かさなかった。ちょうど、進水式とかで色とりどりの旗をおし立てた漁船をみることが出来たし、櫓の漕ぎ方を習っていた誰かが沈没しかけて大いに慌てたと言う話や、朝巨大な蚊の隊列を発見して驚いた話などおまけがついて懐しい思い出の一つになっている。もう二十年以上前のことである。

[redacted]

戦後の書道協会

発足から統合まで

安部遊雲

県美協常任委員・県かな書作家協会長・書道

昭和二十二年の秋、城田道雄先生に誘われて、坂ノ市高女勤務の野田康男氏を訪問した。バナナかごに一匹のボラを入れて、田舎道を何やら話しながら歩いていた同氏の姿が目にうかぶ。

野田家における会議の結論は、先般東京で開催された、日本書道振興協議会結成準備会に出席した両氏の報告をもとに、討議した結果、仮称大分県書道協会を結成しようということになった。

早速県下の人々によびかけてみたが、出席者があまりにも少なく、流会となった。

小学校から習字がなくなる。これを復活するために開かれた準備会であり、これをきっかけに、大分県書

ても、亜流、次亜流の諸君が新人書家、現代書道家と自負して師匠の手本の臨書、倣書に終るのでは芸術の進歩に貢献し得ないいわゆる「奴書人」に終止するのではないか、流行の始めにはマスコミもこれを推賞し、高揚し過ぎた感があった。いずれにしても、その帰趨（きすう）は歴史が証明するであろう。ともかく創作意欲の出現は日本書道界の一革新を期したもので、同時に書道が「自由の場」であることを開明した。

しかしながら自由は奔放に陥り易い。書道には厳しい制約があることを銘記して、制作に当たるべきだと思う。最後に一語を記して筆をおく。

気どらないで自分の持ち味を出そう。

[redacted]

スバルの顔（29年11月写）
第8回スバル展目録から

前列左から小野一郎・江藤明・中条正一・薬師寺浜
岩尾秀樹　2列目 市原康孝・広瀬通秀・木村昌斗志・
松原朝丸　3列目 神田千里・菅久・岩男 順・幸米二
最終列　松岡定・内田弘

スバルは昭和23年…大分県に住むことのスポンタニテ（土着性）と美術の国際性を自覚するモンヂュアリズム（世界主義）の立場に絵画精神の焦点をおき、美術の創造に前進する……と宣言して出発した。
当時、絵画、彫刻、写真の部門より春夏秋冬の四季に発表展をもち、春を本展とし、夏秋冬を習作展として相互の研さんを重ねていた。

道協会を結成しようとしたのであったが、流会した。しかし、このままではいけないと思い、流会の原因を考えてみた。

時をおかず、三宮鎮雄、秦四津生（第二高女勤務）の両氏を交え、数回にわたり会談した。会議の中心は、①どうしても仮称大分県書道協会を結成する必要がある。②どのようにしてよびかければ、人が集まるか、の二点であった。

間もなく三宮氏が県教委に出向したので、同氏の立場からのよびかけを要望したが、実現にいたらなかった。城田先生は一身上のご都合で、このことから遠ざかられていた。事は急を要する。ちょうど、大分師範学校創立七十週年がやってきた。これを期してやろうということになった。　第一高女で準備会を開催し、二十三年正月、大分県書道協会第一回展開催と同時に会を結成した。

二十三年三月末、日本書道振興協議会が結成されたが、県代表出席者は、九州からは私一人であった。数班に分かれ、要路に、小学校習字復活を請願した。（この旅行、片道汽車賃八円と、故、後藤白草氏のくれた米五合のことは忘れられない）

協会にも、危機が数回あった。結成半年たらずして、開店休業の状態となった。（私事優先の思想が原因といえよう）。しかし、小学校習字復活運動は続けなければならないので、間もなく、大分県書道教育研究会が結成された。三十年頃、日本書道連盟（日本書道振興協議会の後身）関西総局の設置に伴い、この支部下にありて県書道界をもりあげようとする考え方と、協会再発足の考え方があったが、二論出現を機会に、委員制を採用し、事務局を強化し再発足した。故、三宮鎮雄事務局長の努力により、協会らしい基盤をつくりあげ、軌道にのった会は、又以前の会長制に復した。

竹田展審査慰労二次会の席で、美協のM先生とO氏と同席し、統合の話をしたことがある。時機尚早論と、機熟すの論戦であった。別れの時、俺たちはよいが、若い洋画のモサ連の反対が気になるといった。同じことを恩師M先生からも聞かされていた。

人々のこうした統一への動きは、先進県や日展などの影響をうけて、県美協統合へと進展した。

新世紀群の出発

コッペ展がはじまり

木村成敏

県芸振会議理事・県美協元委員・洋画

アトリエがほしいという画家、愛好家の痛切な要求にこたえて私の店にお粗末な倉庫をつくった。当時何人かの人々が毎日出入りしていたが、昭和29年頃無名の青年二人（堤延樹、清水将美一現在東京）がこのアトリエでコッペ展という展覧会を開いたのを契機に、ここに集まった若い人々が新世紀群というグループを結成した。

主なメンバーは当時東大在学中の磯崎新、高校生の吉村益信、中学生の赤瀬川原平、青年教師の佐藤至良それに私など、「県展、もはや救うべくもない。保守的アカデミズムをわれわれの手で打破しよう」とオーバーな宣言、今思い出しても冷汗もの、当時はまさに意気さかんであった。

県展の落選展、若草公園での野外展、県下サークルの交流、日本アンデパンダンへの集団出品、一流画家やヌードを招いての美術講習会、サークル誌の発行、そしていまだにつづいている週一回のデッサン会。

朝鮮戦争のこと、平和を守れ！といっただけで赤いレッテルをはられるというきびしい米軍の圧力の中で私たちはたえず平和を求め、真理と美を追求しようとする働く者のひたむきな制作活動をなつかしく思い出します。

酷寒の厳冬にあつかましく批評をお願いして、よろこんで応じてくださった故伊谷賢蔵先生が暗いアトリエで鼻をすすりながら親切に一枚一枚の作品を批評し

県写真作家協会

サロン調に飽きたらず

大崎聡明

県芸振会議理事・県美協副会長・写真

その頃は、日本が敗戦から立ち直って行く過程を象徴する様に、日本のカメラは世界に躍進して行きカメラブームに乗って、大衆化された写真は各種のコンテストや、アマチュアの写真グループを数多く生み出していった。彼等はコンテストで入選や受賞することで名を上げ実（賞金・賞品）？を得ることに血道を上げていた。その頃、木村昌斗志、コバト半平（国画会）大崎聡明・糸井英雄（二科会）らのグループ、ブラックがあった。

彼等は従来のサロン調の写真に飽きたらず、作家としての意識にもえて中央展で着々実績を上げていた。それは昭和27年から昭和30年頃の事であった。大分市で開かれた「ザ・ファミリ・オブ・マン」の写真展は絶好のタイミングであった。これはニューヨークのスタイケンが、企画したもので世界中の写真家の作品の中から503 点を選び人間の生から死までの色々な場面を抜き出して、人間の共通性を印象づけた空前絶後の写真展であった。

それにしげきされ全県下を統一した協会を作ろうという気運がもり上がり、二年後全県を対象にした写真美術展を大分合同新聞が企画し、33年５月１日、トキハ文化ホールで、第１回大分県写真美術展が開かれた。審査員として二科会、緑川洋一が来県しこれをきっかけに写真作家という作家意識をもった写真をつくろうではないかという事になり、光洋クラブ（別府）ブラックを中心に別府写真会、大分写真同好会、フォト、ユニなどの代表が発起人となり34年２月28日別府市にあった、吉村文化ホールで20のグループの代表を集めて、大分県写真作家協会として発足することになった。

てくださったことなど。

また若草公園での野外展に当時の上田保市長、故福田平八郎先生が来られて署名とカンパをくださったことなども思い出されます。

一昨年でしたか20周年記念展を開催、久しぶりの作品での出会い。何百人が出入りしたかわからないサークル、一つのすきな仕事を中心にして交流があるということの大切さ、「絵をかこう」という働く人々の最近の動きはたいへんうれしいですが、「何を、何のために、だれのためにかくのか」という問いかけで、何かが一つ欠けているのではないか？と思います。

[redacted]

グループ前衛のころ

批評の場を組織

十時　良

県美協委員・洋画

昭和20年代は戦後の虚脱と廃虚の中から新しい文化を求めて、全国的に数多くの美術家集団が結成されたといわれている。地方文化の興隆とともに、大分県画壇にも新しいグループが続々と誕生した。

県内での主な作品発表の場は、春秋の県美展であるが、この頃から県美展も活気を示し、急激に出品数が増えていった。活発な美術活動の中で昭和23年に第1回展を開き以後十何回と続いた「スバル会」の活動は特筆されてよいであろう。

この動きが昭和30年代に入っていろいろの面で反省期に入る。それは一つには10年近く続いたグループがマンネリ状況から淘汰（とうた）されていったこと、

あえて作家という言葉を使ったことにこだわるわけではないが、従来のサロン・コンテストのイメージを打ち砕こうとする姿勢が強調されたわけである。

名誉会長に長野正、会長に堀内琴月（光洋クラブ）理事、糸井英雄（ブラック）会員、柴田豊次、幸米二、広瀬奏、浦野進、松原朝丸、山本善丸、甲斐武国、木村昌斗志、コバト半平、大崎聡明、三重野元、野崎豊水、内田弘、木村義則、の15名、ほかの出品者は加盟員とした。審査員は緑川洋一、植田正治、伊藤逸平、長野重一、等一流の審査員を招へいして写真の向上にめざしたのである。大分県写真作家協会のこの努力がなければ後の県美展三部統合は実現をみなかったのではなかろうかと思われる。又協会の創立会員が、いくら写真作家をめざせと叫んで次元の高い作品を望んでも一般応募者は一度おぼえた蜜の味から容易にぬけるものではなかろう。この意味において今もなお、大分写真作家協会時代を思い出すのである。

[redacted]

内容的には地方における批評の甘さの問題も指摘されよう。又一つにはこの頃から起こってきた個展ブーム的な傾向が出てきたことなどもある。

このような中で昭和35年６月にグループ「前衛」が結成された。「平和を根幹としたきびしい現実認識のうえに立って創作し、批評の場を組織する」とグループの主張を明確に、約１年の準備期間を置いて昭和36年春、第１回展を別府の物産観光館ギャラリーで開いた。メンバーは安藤真・井上佐之助・江藤明・神田千里・児玉成弘（２回展以後退会）、十時良の６名である。以後６回展まで続く。（会場は１回展以後はトキハギャラリー）

「前衛」というグループ名を冠することで、とかくの論議もあったが、平和を根底にしたきびしい現実との対決の姿勢は一つの主張として同人の共通意識でもあった。又批評の場を積極的に持ち、グループ以外の人々との交流も多かった。詩集団「心象」との「人間のテーマによる詩と絵の展覧会」はその意味ではユニークな取組みであったといえる。前衛東京展の構想も話題になったが、第６回展を終わった時点で、お互いの制作の上でグループ展の意義に疑問を感じ、グループの解散を宣言した。

お互いが再びグループをつくる必要を感じた時には又、集まろう…と、それぞれが、かたい決意を秘めて〝個〟の出発をちかったことは、きびしい作家精神に燃えている証拠でもあった。

[redacted]

大分写真同好会の歩み

月例作品の制作と発表

三重野　元

県美協事務局次長・写真

戦前から、日本写真会で活躍していた吉田松市さんが終戦後の昭和23年ごろ、大分市栄町（現府内町）でヨシダカメラ店を経営、ここを事務所にして大分写真同好会を発足させた。歯科医の古沢さん・是永さんらの先輩を始め、若手の三重野元、山村義則、大塚雄三、菊入昭蔵、植田恵秀、安部喜六、平井豊、矢野政道、矢野義隆らが参加し月例作品の制作、発表が行われ毎月パンの「つるや」の店内に展示し公開した。その後も阿部一晴、村田仁、幸弘、村上勝一、清島寿昭、嶽道盛繁、佐藤時男、阿部光宏らも参加し、40名を超える会員を抱える最大の写真クラブに発展した。

会員が多くなると、月例審査もベテラン組の「半切の部」とその他の「四切の部」の二部制を採用して、四切の部から、半切の部へと、成績によって登用することになった。

また一方ではカメラ誌の月例応募、各種コンテスト参加など広範な活動を展開、なかでも佐伯光影会、別府写真会に呼びかけて合同写真展をトキハデパートで開催したことは、当時としては新しい方向として注目された。

昭和31年「ザ・ファミリー・オブ・マン」という世界の著名写真家によるヒューマニズムに溢れる写真展は井のなかの蛙であった大分県の写真界に衝撃を与え、これが契機となって大分合同新聞社が主催して大分県写真展が33年に開催され、　私も出品して入賞した。

翌34年には大分県写真作家協会が発足して会員になった。

現在では吉田さんを中心に阿部光宏、村田　仁、佐藤万寿雄、清島寿昭、植田恵秀らが会を盛りたてると同時に、県美協写真部の中心となって活躍している。

[redacted]

市松模様の床

小　野　一　郎

県美協常任委員・県立芸短大助教授・日本画

第３回展に（昭和22年11月19日～26日トキハ、審査員・日本画一吉岡堅二、洋画一小磯良平、佐藤敬、権藤種男、江藤純平。搬入総数日本画45点、入選24点）野を越え山を下って運んで来た私の30号が、すみっこの壁に並べられていた。談笑しながら会場を歩く吉岡氏に勇気を振って批評をお願いすると、横から佐藤敬氏が言った「君、この床の方が君の絵よりずっと美しいよ……」。私は黙って床に目を落とした。ブルーグレーとベージュの市松模様の床だったように記憶している。その色が鮮烈な印象として今もよみがえってくる。

[redacted]

深夜まで芸術論

児　玉　成　弘

県美協委員・洋画

34年頃県展で受賞し、スバル解散直前に一度招待出品して「前衛大分」を江藤明、神田氏らと結成。さらに43年に脇、広瀬、岩尾、神田、三浦勉、二宮秀夫氏らと「七人の会」をつくり100号以上の作品を並べて合評会など行った。特に詩人や写真家、書家との交流が盛んに行われていたことが印象に残っている。

又、新世紀群も木村氏などが中心で毎年楽しい野外展などしていた。労美展もアマチュアの登竜門として年々盛んになった。30年代は中央展も次々に大分へ進出したし、グループ展、個展は全盛をきわめた。夜おそくまで芸術論をたたかわせていたのが印象的。

[redacted]

経専絵画同好会

寺　司　勝次郎

県芸振会議会員・県美協元委員・版画

昭和22年に大分経専に絵画同好会をつくった。同好の志５名による発足だったが、食糧も思うにまかせない時代だっただけに絵具を捜すのには苦労した。

英文学の佐瀬教授に代表者になってもらってスケッチ行、作品発表会、基本もクソもなく、ただかきまくった事が忘れられない。あの時、10号の作品を卒業記念にと学校に残したが、旦の原への移転の際に行方不明になった由。残念か幸運か？

当時のメンバーで現在まで絵をやっているのは、小生と佐藤至良氏。あとは田北豊氏など立派な経済人になって活躍している。

[redacted]

あ、生野兄

森　　夜　潮

県美協元委員・工芸

かつて美協委員会に列していた頃、私は畏友生野兄に誘われて、幾度か些君亭の人となった。兄は既にその頃から健康に留意し、西式を始め保健具をそろえ、自ら体質改善に専らであった。当時異状のなかった私はからかい半分「老化はまだ早いよ！」などと強がり言ってみせたが、どっこい遂に高血圧疾患で、目下小康を保っている。

三年前大分で上田大人から招ぜられ、目に青葉、絵皿に初鰹のおあいしの座で久しぶり元気な姿の生野兄と歓談した。それが思えば今世最後のお別れとなったのである。

（[redacted]

テレピンのにおい

多　郁　　常

県美協会員・洋画

戦中戦後の変ぼうの中で、静かに力強いいぶきが聞えた。かと思うと怒涛となった。そうした中で絵画は目ざましく発展した。先輩も黙々と板やカルトン、貧弱な材料で自己を究明していた。

故県美協会長・権藤種男氏のやぎひげの口もとをピクピクさせながらひたむきに取り組む姿勢、小筆のさばき。松根油（テレピン）の香りがただよううす暗い兵舎の中で仲町氏が赤レンガをナイフで探求している姿など、当時の思い出の一つである。

[redacted]

父の遺した油えのぐ

菅　　玲　子

県美協会員・洋画

父の遺した小さな油えのぐの箱が、私の絵をかくきっかけとなった。戦後まもなく荷場町小学校の講堂で初心者を集めて油絵の講習会が開かれた。

物資のない頃で、カンバスもなかなか手に入らず、カルトンやベニヤ板に懸命にとりくんだ。「うん、なかなかいいぞ」とひとりひとりに声をかけておられた権藤先生は、私のかきかけのとうもろこしの絵に一粒一粒ポツポツと筆を入れてくださった。今まで持てあまし気味だった作品がみごとに生きかえり、その不思議さに心から驚いてしまったことをなつかしく思いだす。以来一筋、絵筆と離れられなくなってしまった。

[redacted]

グライダーの羽布に絵

三　浦　佐　郁

県美協委員・書道

戦前戦中より旧制中学の教員をしていた私、終戦後鶴崎中学に転じた。人手不足で図画、書道、工作の三教科を担任して三年間過した。その頃の画用紙は黒っぽい極めて悪質のもの、絵具は買うにもない。私はグライダーの羽布をカンバスにして十年前に買った油絵具の残りでかいた。色はそろわずホワイトだけは店にあった状態、この頃私は、書道に専念すべきか、絵に進むべきかの岐路に立っていたが、結局書道に進むようになった。はずかしながら当時県展に水彩を出したが、現在水彩１点と油絵１点があり当時の思い出のものとなっている。

[redacted]

書　道　30　年

西　村　春　斎

県美協事務局・書道

書道部門の伝統は永い。大分県書道協会が結成されたのが現美協誕生の20年前なのだから、今年で通算30歳の壮年期を迎えるわけ。

書道部長・首藤春草先生が「読める芸術」＝近代詩文書を県下に始めて発表したのが14、５年前であった。当時新しい魅力と新しいむずかしさに観る人、書く人の関心が集中したのも無理はなかった。

書道人口は倍増を重ね、今や10人に１人は筆をもち、わけても県展におけるそれは現代文化水準を如実に物語っていると言えよう。

[redacted]

昭和48年度決算書

大分県芸術文化振興会議

収入

科目	予算額	補正額	予算現計	決算額	差引過不足額
補助金収入	500,000	0	500,000	500,000	0
・県費補助金	500,000	0	500,000	500,000	0
会費収入	300,000	0	300,000	300,000	0
・団体会費	180,000	0	180,000	201,000	0
・個人会費	120,000	0	120,000	99,000	0
事業収入	104,000	0	104,000	104,000	0
・年鑑収入	80,000	0	80,000	80,000	0
・会報収入	24,000	0	24,000	24,000	0
雑収入	103,000	0	103,000	107,149	4,149
・広告料	100,000	0	100,000	100,000	0
・預金利子	3,000	0	3,000	7,149	4,149
繰越金	23,701	0	23,701	23,701	0
合計	1,030,701	0	1,030,701	1,034,850	4,149

支出

科目	予算額	補正額	予算現計	決算額	差引過不足額
賃金	162,000	0	162,000	147,000	15,000
報償費	120,000	0	120,000	116,000	4,000
旅費	160,000	△59,000	101,000	80,400	20,600
需要費	511,000	89,000	570,000	569,422	578
印刷消耗費	471,000	89,000	560,000	559,622	378
食糧費	40,000	△30,000	10,000	9,800	200
役務費	50,000	0	50,000	50,000	0
通信運搬費	50,000	0	50,000	50,000	0
使用料及賃借料	10,000	0	10,000	5,860	4,140
予備費	17,701	0	17,701	3,635	14,066
合計	1,030,701	0	1,030,701	972,317	58,384

繰越金　1,034,850－ 972,317＝62,533

昭和49年度事業計画書

大分県芸術文化振興会議

事業名	期日	場所	内容
1　機関紙の発行	季刊発行	23号 24号 25号 26号	「芸振」（県芸術文化振興会議機関紙B5判12P）を季刊で発行、個人をはじめ市町村、県立学校、図書館、報道関係等に配布する。
2　「大分県文化年鑑」の刊行	年刊		「大分県文化年鑑」（A5版約150P）を刊行、各部門別に活動状況県芸術祭行事等県下の芸術文化活動のあゆみを集録し、あわせて文化団体名簿、市民会館、文化会館の使用規定を付し刊行する。
3　第10回大分県芸術祭	10月1日 ～ 11月30日	県内一円	大分県芸術祭を共催し、文化団体に芸術祭への参加をすすめるとともに、芸術祭共催行事等を実施し、県民文化の振興をはかる。
4　市町村・芸術文化団体事務局長研修会	7月3日	大分市	実質的に団体の運営に当っている者が、情報交換や問題点を出し合うことにより組織のあり方と今後の運営等について研究協議をする。
5　文化講演会	2月中旬	大分市	理事会、総会とあわせて各ジャンルに共通なテーマで講演会を催し、会員の文化水準の向上をはかる。
6　市町村芸術文化関係活動指導調査	6月 10月 ～ 11月	県内一円	各市町村を巡回し、文化団体の活動状況や、県芸術祭参加行事の内容等を調査し、文化活動の振興や文化協会結成等の促進をはかる。
7　会議 (1) 事務局会議 (2) 理事会 (3) 総会	 5月2日 5月13日 12月18日 5月13日 2月中旬	 大分市 大分市 大分市 大分市 大分市	主な議題 1　第10回大分県芸術祭について 2　県芸振の振興等について 文化講演会
8　協賛事業 第6回九州沖縄芸術祭 ○江藤俊哉バイオリンリサイタル ○グラフィックデザイン展 ○日本の芸人 ○団伊玖磨のすべて ○文学賞公募	 9月16日 9月24日～29日 10月2日 10月27日 5月1月～8月31日	 津久見市民会館 大分市府内会館 天瀬町中央公民館 佐伯市文化会館 県内全域	第6回九州沖縄芸術祭を後援することにより、県内における芸術文化活動の振興をはかる。

昭和49年度予算書

大分県芸術文化振興会議

収入

科目	予算額	前年度予算額	比較増減
補助金収入	500,000	500,000	0
県費補助金	500,000	500,000	0
会費収入	300,000	300,000	0
・団体会費	210,000	180,000	30,000
・個人会費	90,000	120,000	△30,000
事業収入	100,000	104,000	△ 4,000
・年間収入	100,000	80,000	20,000
・会報収入	――	24,000	△24,000
雑収入	107,000	103,000	4,000
・広告料	100,000	100,000	0
・預金利子	7,000	3,000	4,000
繰越金	62,533	23,701	38,832
合計	1,069,533	1,030,701	38,832

支出

科目	予算額	前年度予算額	比較増減
賃金	150,000	162,000	△12,000
報償費	130,000	120,000	10,000
旅費	100,000	160,000	△60,000
需要費	605,000	511,000	94,000
・印刷消耗費	590,000	471,000	119,000
・食料費	15,000	40,000	△25,000
役務費	60,000	50,000	10,000
・通信運搬費	60,000	50,000	10,000
使用料及賃借料	10,000	10,000	0
予備費	14,533	17,701	△ 3,168
合計	1,069,533	1,030,701	38,832

会員の異動と変更

1 会員脱退

(1) 団体会員

1 赤トンボ句会　13 短歌げっしゅう社

62 堀　小芳江小唄絃秀会

(2) 個人会員

34 桑原　秀礼

2 団体会員、代表者、事務局長、住所等の変更

36 大分県勤労者音楽協議会
代表者　板倉　英之→九岡　久
住　所　大分市都町[redacted]→
大分市長浜町[redacted]

39 大分県三曲協会
事務局長　合沢修山→吉田　佑山
住　所　大分市都町[redacted]
大分市新高[redacted]

38 大分県合唱連盟
事務局長　挟間　文男→武藤　喜好

75 大分県児童文化研究会
代表者　河村　一→三河尻修二
事務局長　安長　正美→山本　正名
事務局住所　大分市荷揚町（荷揚小学校）→
大分市[redacted]三河尻修二

95 大分県高等学校文化連盟
代表者　楠本　達男→松並　篤
事務局長　安部　茂→佐藤　至良
住　所　大分市上野丘、上野丘高校内→
大分市今津留大分商業高校内

97 大分市芸能文化協会
事務局長　有定　稔雄→森　信男

109 別府芸能文化協会
事務局長[redacted]→近長　武男
住　所　別府市光町[redacted]→別府市[redacted]
電　話　(23)2627→(22)4916

16 歩道短歌会大分支部
代表者　上田　耕司→船河　正則
住　所　大野郡大野[redacted]

47 大分大学マンドリンクラブ
代表者　津志田総穂→田辺　義秀

68 日本民踊研究会九州支部
事務局長　菊地豊喜久→藤　豊優
住　所　別府市北浜[redacted]→
別府市中[redacted]

74 大分県勤労者演劇協議会→大分市民劇場
住　所　大分市[redacted]→
大分市長浜町[redacted]

3 県文化年鑑会員名簿の訂正

44 大分交響楽団
事務局長　岡村　光夫→岡村　光郎
住　所　大分市政所大在中学校→
大分市岩田町[redacted]
電　話　(2)0024→(58)5879

（P120）

41 後藤美知子の顧問を上段の後藤正夫の段へ
47 佐藤村夫の顧問を上段の佐藤義詮の段へ
48 佐藤義士の空欄へ理事を入れる。
50 末永　要の理事を削除して上段の首藤春草へ
52 進来　哲の事務局次長を上段の菅久の段へ
53 湫田俊一の理事を削除して上段の進来哲へ
56 竹山順子の理事を削除して上段の園田喜平へ

波紋

香り高い芸術会館に

県芸振会員・県美協事務局次長・書道
山口九碩

県立芸術会館問題についていろいろと議論が沸騰しているが、もちろん美術協会の以前から要望している①国際的日本的美術展のできる展示場。個展、グループ展のできる展示、機能を備えること。②用地は足場のいい大分市中心部を選び建設すること。なおあくまでも教育長発言にもあったとおり美術を中心とする芸術会館であってもらいたいのは言うまでもないことである。

ところが土地問題等については県が第一候補にあげた大手公園が断られたので近々のうちに市内中心部に最適な位置を決定するものと思われる。

問題はそれからであると思う。いざ建設はしたものの利用の仕方、方法について本当に県民が気軽に親しめる会館になるのか、〝美術を中心〟ということになれば近代美術館的性格を備えなければならないが、少なくとも大分県出身の美術家、歴史に残っている有名な田能村竹田をはじめ、片多徳郎や朝倉文夫、福田平八郎、生野祥雲斎各先生方の代表作ぐらい常陳してもらいたいものだと思う。

作品購入についての予算はとれているのだろうか？

週休二日制が問題になっている時、休みになればデパートをうろつくぐらいしか行くところがない大分県に、もっと文化の香り高い芸術会館（近代美術館）が一日も早く建設され、ゆっくりと美術の鑑賞ができる日がくることを希望してやまない。

（〒870　大分市新町14－3）

本年度文化課文化係と芸振事務局

文化課長　矢野朔雄、　課長補佐　山村唯男、
文化財専門員　平野昭彦、　主幹　後藤昭六、
庶務係長　河野通徳（教育庁総務課より）、
文化係長　児玉照明、　文化財第一係長
後藤正二、文化財第二係長（兼任）平野昭彦、
文化係主任　佐藤七夫（教育庁総務課より）、
事務　中村祥子、芸振事務局長　矢野朔雄（兼任）、
事務局次長　菅　久、同　山本勝彦
事務局は文化課文化係。

なお機関紙「芸振」の編集は菅　久が担当する。

49年・50年度『芸振』編集計画

―編集テーマ『あの頃・あの時』―

県芸振会議および県芸術祭10周年を記念して（戦後20年から県芸振会議が発足した39年頃までのこと）

23号／6月　大分県の美術「あの頃あの時」
24号／9月　大分県芸振会議および県芸術祭発足の頃「あの頃あの時」
25号／12月　大分県の文化財「あの頃あの時」
26号／3月　大分県の演劇「あの頃あの時」
27号／6月　大分県の音楽「あの頃あの時」
28号／9月　大分県の文芸「あの頃あの時」
29号／12月　大分県の地域文化および生活芸術「あの頃あの時」
30号／3月　大分県の舞踊「あの頃あの時」

※　各号ともほかに「波紋」と「消息」および広告を入れる

筆、墨、硯、紙、法帖
専門家から一般用まで
書の四宝店
西本皆文堂
筆墨部　大分市中島東　㊱0338
卸　部　大分市碩田町　㊱6253